琉游舎

アトリエ琉游舎だより 221号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2025年12月31日日発行

謹賀新年

★今年もみんなで作る琉游舎をよろしくお願いいたします

★定例会は写経会をやっていきます

★皆さんのこんなことしたい あんなことやりたいがあったら お知らせください 是非一緒にやっていきましょう

●写経会は毎月第一日曜日に行います。初めての方も写経に必要な道具 一式ご用意しています。手ぶらでお越し下さい。手本をなぞる方法、経文を隣に置いて白 紙で写経する方法など、お好みの方法で写経して下さい。文字に一心に向かい合っている と１時間という時間はあっという間です。

●読書会は法華経、歎異抄、般若心経、ダンマパダ、立正安国論、阿弥陀経、そしてまた法華経を読んできました。ここで一旦定例会はお休みいたします。もし皆さんでこんな本を読書会で読んでみたいというご要望がありましたら、再開します。是非その時はお知らせ下さい。

●映画会は皆さんから再開の要望があればまた始めたいと思います。

1月・2月スケジュール

	火	水	木	金	土	日
			1月1日 新年祝祷会 １０時半	2	3	4 写経会 13時半から
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	2月1日 写経会 13時半から

新年祝祷会
1月1日（日）
10時半から

写経会
1月4日（日）
2月1日（日）
13時半から

狂言綺語…カミとホトケの出会い(承前)

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

カミとホトケに出会いがあれば、その別れもあります。出会いから融合までは多くの年月と人々の精神の営みがあったはずです。そして出会いの積み重ねが、私たちの精神の奥底を流れる「信行」の道となったとき、初めてそれを伝統や民族精神と呼べるのです。それが私たちの心底を流れるまでに必要とした膨大な年月と、名もなき人々の無限の精神の営みは、しかしある特定の力によって強制的に引き裂かれました。明治元年3月28日の神仏分離令です。出会いから融合までの流れが人々の自然な精神活動の結果であるならば、別れは維新の政治権力による強制的な別れです。神仏分離令は政府が「王政復古」「祭政一致」の理想実現のために、神道の国教化を企図したものです。天照大神(天皇）を頂点とする祭政一致の統治です。今までの、権力(摂関政治・幕府）と権威(天皇）の祭政分離の統治方法から、すべての国家権力と権威を天皇を頂点として再編し直すという、日本人が営々と積み上げてきた権威と権力の関係性を土台からひっくり返すような革命です。しかし祭政一致の政治は、西洋の列強国と伍して行くための現実的な方法ではないことに気づき、制度上、祭政一致の統治は不発に終わりました。そして廃仏毀釈は政府でなく民衆によって行われたのです。

私たち僧侶はなぜ廃仏毀釈に抵抗しなかったのか、150年後の今、仏教がどのように変容していったのかを、自らに問うてきたでしょうか。神仏分離令は、神社と寺院を分離してそれぞれを独立させ、神社に奉仕していた僧侶には還俗を命じたほか、神道の神に仏具を供えることや、御神体を仏像とすることも禁じました。この法令を根拠に民衆は廃仏毀釈を実行したのです。寺や仏像は破却され、同時に日本人のよりどころであったホトケの法(知）とカミの精神（情）もいともたやすく破却しようとしたのです。今ここで詳しく述べる余裕はありませんが、なぜ、日本人はそのよりどころをこうも簡単に捨て去ることができたのか、その理由を考えるに、宗教が民衆の間では単なる現世利益と娯楽の対象と成り下がってしまったからに違いありません。そうでなければ権力の命令に廃仏毀釈という自らの精神のよりどころを破却する暴挙には走らなかったはずです。政治は布告はしましたが実行したのは私たち民衆です。人々は、仏教が救済の宗教として機能していないことを見抜いていたからなのでしょう。そして今も機能しているとは到底思えないのです。

先日、6日間の山口県長期滞在ツアーに参加して、県内の主要観光地をほぼすべて巡ってきました。私は出家以来、神仏分離令を命じた薩長の指導者たちがどのような風土でその精神性を培ってきたのかを体感したいと思っていました。人は地域の自然(地形、気候、土地)、つまり風土によって育まれ、その風土が作る集団(社会）によって智慧と精神は大きく規定されるのではないかと考えるからです。その土地を訪ね、その地方が見渡せる城山（必ずあります）に上って、街を一望し、その後にその町並みを自分の足で歩くことで、その土地固有の精神性に触れることが可能であるのではと私は考えます。薩摩については数年前に既に城山に上って西郷隆盛終焉の地に立ちました。大久保利通も暗殺されているので、結果的には薩摩は維新の原動力になったとしても、長州との権力闘争に敗れて、その後の近代日本の道筋を今に至るまで推進する風土とはなれなかったものと思われます。結局維新以来、日本の権力の道筋を作ったのは、長州の風土だと私は考えます。山口県で体感した長州の風土と、知りうる歴史の事実を重ね合わせてみると、観えてきものがあります。日本人の精神性に本源的にはなかった祭政一致、神仏分離、神の序列化は、なぜ保守すべき伝統として維新以来今に至っているか、それは長州の風土が作った現実主義的な精神にあると思われたのです。

ここから述べることは、個人的な上に実証的な検証もされていない私の観た長州の風土とその現実主義的な行動です。山口市は県のほぼ中央にある盆地です。幕末に長州藩の藩庁が萩から移されて、それから今まで県庁所在地となっている都市です。四方を山に囲まれ、今では車でないと東西南北どちらにも行くにも不便する、交通の要衝とは思えないところです。それまで藩庁のあった萩は日本海に面し、夷狄の攻撃をたやすく受けやすい地理上の欠点があるため、藩防衛の観点から政庁を室町時代に西ノ京と呼ばれた山口に移しました。山口は山に囲まれているため防衛上のメリットもあり、徒歩と馬で移動するには藩の中心に位置するため、それなりに当時は交通の要衝だったのかも知れません。実際萩にも、九州への玄関口下関にも、瀬戸内の海軍・海運の拠点三田尻(防府市）にも、山越えながらほぼ車で1時間内外の移動距離です。このような地理条件を概観する中で、一番の驚きは萩城のある地勢でした。海岸にできた三角州の中にある小高い山の上の萩城は三方を海に囲まれ、狭い平地の向こうは山です。ここは外洋以外からは日本国内のどこからも攻撃されない、防衛拠点として作ったとしか思えない城です。つまり関ヶ原で徳川に敵対した毛利が、江戸時代になっても、まだ徳川の攻撃を恐れて、物流には不便だが防御にすぐれた萩の地を選んだとしか思えません。穿った見方をすれば、その他に萩が藩庁所在地である利点は、大陸との交易(密貿易)を考えていたこと以外、地勢的には思い浮かびません。幕末には列強国に喧嘩を売って(攘夷）手ひどい被害を受けたとたん、内陸部に逃げ出して、今度は外(攘夷）と戦うのではなく、内(倒幕）に向かって兵を進めました。尊皇攘夷の看板は、あっという間に尊皇倒幕の錦の御旗に宗旨替えをしたのです。そのためには外にだけ開けている萩より、内に向かって京にも、江戸にも、九州にも行き来のしやすい山口に拠点を移したことは、非常に合理的で現実的な判断と私には思えます。現実的な風土については紙面が尽きました。今回はここまでです。

私は長州の現実的対応を原理原則や思想性に寄らないご都合主義と非難するつもりはありません。神仏分離令も廃仏毀釈も、全てこの長州の(あるいは現在の日本）の現実主義の文脈で観ることで、私たちが今どのような日本を生き、世界はその日本をどう見ているかが分ったような気がする山口の旅だったのです。